

令和 7 年度 一般選抜 過去問 解答解説

【国際関係コース:小此木政夫『朝鮮分断の起源』】

問 1: 日本が冷戦の舞台設定に果たした役割(200 字以内)

- 解答例 A(標準的構成):

日米戦争を通じて大日本帝国の版図が、朝鮮、台湾、満洲から東南アジアまで拡大した結果、日本の敗戦によってその広大な地域に「力の真空」が発生したからである。この巨大な権力の空白地帯をいかに埋めるかという米ソの対峙が、北東アジアを冷戦の舞台へと変質させた。日本が戦争の当事者として勢力圏を極端に拡大し、その崩壊が政治的空白を生んだことが、東アジアにおける冷戦開始の物理的・地政学的背景となったのである。

- 解答例 B(因果関係重視):

日本が帝国の版図を東アジア全域へ拡大させたことで、敗戦後にその広大な領域において統治主体の不在による「力の真空」が生じたためである。この空白を埋めるべく米ソが対峙し、日本軍の降伏受理のために設定された北緯三十八度線が、東西冷戦の波及により体制を隔てる「鉄のカーテン」へと変質した。日本が一方の当事者として戦域を拡大させたことが、結果として冷戦の舞台を東アジアに設定する決定的な要因となったのである。

- 解答例 C(概念抽出型):

大日本帝国の版図がアジア各地に拡大していたため、敗戦に伴いそれらの地域に一気に「力の真空」が発生したからである。この空白地帯において、日本の安全保障に関連する紛争要因を米国が引き継ぐ形となり、米ソの安全保障観の対立が直接的に持ち込まれた。日本の敗戦が東アジアに巨大な政治的空白を生み出し、そこが米ソの地政学的な境界線として設定されたことが、冷戦の舞台設定における日本の果たした大きな役割である。

問 2: 指導者たちにとっての朝鮮分断の意味(200 字以内)

- 解答例 A(標準的構成):

「独立」と「統一」という二つの目標が同時には達成できない「非両立性ないし相克」である。具体的には、独立を達成しようとするれば南北の分断が不可避となり、逆に統一を実現しようとするれば戦争が避けられないという不都合な状態を指している。この二つの価値の相克により、民族の悲願である統一よりも、可能な地域でまず政府を樹立するという単独政府論が優先され、それが武力統一論や分断体制の固定化へと繋がったと捉えている。

- **解答例 B(論理構造重視):**

独立を達成しようとするれば統一が不可能になり、統一を実現しようとするれば戦争が不可避になるという、両者の「非両立性ないし相克」である。筆者はこれを、解放後の朝鮮に定着した「不都合な状態」と表現している。南北の指導者たちが、冷戦の勃興とともに分断の克服よりも自勢力の政府樹立を優先させた結果、ナショナリズムによる独立意欲が統一戦争を準備し、最終的に冷戦体制の一部として分断が制度化されたと分析している。

- **解答例 C(簡潔・要点型):**

独立を達成しようとするれば分断が定着し、統一を実現しようとするれば内戦が不可避になるという、独立と統一の「相克」である。筆者はこれを単なる一時的な混乱ではなく、冷戦体制と結びついた「分断体制」の誕生として捉えている。民族主義者と共産主義者の双方が、単独政府の樹立や武力統一を志向したことで、独立への意欲がかえって分断を固定化させ、国際的な冷戦構造に組み込まれる原因となったと論じている。

問 3:なぜ朝鮮は分断されることになったのか(600 字以内)

- **解答例 A(構造的要因を重視):**

朝鮮分断の要因は、日本の敗戦による地政学的な変化と、米ソの安全保障観の対立という二層の構造から説明できる。

第一に、大日本帝国の崩壊によって東アジアに生じた「力の真空」である。帝国の版図が広大であったため、その消失は巨大な権力の空白を生んだ。この空白を埋める過程で設定された北緯三十八度線は、当初は日本軍の降伏受理のための便宜的な境界線に過ぎなかった。しかし、これが東西冷戦の波及によって体制を隔てる政治的な「鉄のカーテン」へと変質し、分断の物理的枠組みが形成された。

第二に、米ソの安全保障観の対立である。米国が将来の自由・独立を構想したのに対し、スターリン率いるソ連は地政学的な不安から周辺に「防衛的空間」を確保しようとした。この安全保障観の相違が、信託統治構想を破綻させ、分割占領を固定化させた。

さらに、朝鮮内部の指導者たちの動向も無視できない。独立と統一が両立しない「相克」の状態において、双方が分断を克服するよりも自勢力による単独政府樹立や武力統一を優先させた。こうした内部のナショナリズムと外部の冷戦構造が重なり合ったことが、分断を解消不能な「体制」へと変貌させたのである。

結論として、朝鮮分断は日本の敗戦が招いた力の空白を、相容れない安全保障観を持つ大国が埋めようとし、そこに内部の政治対立が連動した結果生じた、複合的な歴史のプロセスであったと言える。

- **解答例 B(「タイミング」と「地政学」を重視):**

朝鮮分断の決定的な契機は、国際的な冷戦の勃興と、原子爆弾の投下という「軍事技術革命」がもたらした絶妙なタイミングの符合にある。

課題文が指摘するように、もし原爆投下が数ヶ月早ければ朝鮮全土は米軍が占領し、数ヶ月遅ければソ連軍が占領していた可能性がある。あのタイミングで戦争が終結したことが、結果として北緯三十八度線での分割占領という、偶然を孕んだ地政学的境界を生んだ。この境界線は、日本の安全保障上の紛争要因を引き継いだ米国と、自国周辺の安全を死守しようとするソ連の「防衛的空間」の接点となったのである。

また、米国が戦時中一貫して朝鮮を「大日本帝国の不可分の領土」と見なし、占領後も旧来の行政機構を留任させるなどの準備不足を露呈させたことも、現地の反発と政治的混乱を招いた。この混乱の中で、南北の指導者たちは「独立を達成すれば統一が不可能になる」という相克の論理に直面した。

統一を望むナショナリズムは、大国による分割占領という現実の前で、皮肉にも相手を武力で排除しようとする統一戦争の論理へと姿を変えた。これが米ソの冷戦体制と結びつくことで、分断は単なる状態を超えて、友好協力条約などで制度化された「分断体制」へと定着した。朝鮮分断は、大国の地政学的利害と、内部の独立への強い意志が「不都合な形」で衝突した結果生じた悲劇である。

- **解答例 C(高坂理論のフレームワークを活用):**

朝鮮分断は、国家の本質である「力・利益・価値」の三つのレベルにおいて、米ソおよび朝鮮内部の対立が重層的に生じた結果である。

「力の体系」において、日本の敗戦は東アジアに「力の真空」をもたらした。この空白を埋めるべく設定された軍事的な境界線は、米国とソ連の勢力圏を分かち物理的な枠組みとなった。一方、ソ連にとっては自国の安全を保障するための「防御的空間」の確保という力の論理が働いていた。

「価値の体系」においては、ウィルソンの民族自決を掲げる米国と、地政学的な不安に基づき周辺を自陣営化しようとするソ連の「正義」が衝突した。さらに、朝鮮内部でも、呂運亨ら左派勢力の建国運動と、重慶の臨時政府を支持する右派勢力が、それぞれ異なる「正義」を掲げて対立した。この価値の相違が、統一を前提とした合意形成を不可能にした。

「利益の体系」については、解放後の独立が必ずしも統一と両立しない「相克」の状態に陥ったことが重要である。各指導者が民族全体の統一という利益よりも、自陣営による独立の達成という「特定の利益」を優先させたことが、単独政府の樹立を加速させた。

このように、大国の戦略的利害という外部要因と、南北指導者の独立意欲という内部要因が、力・利益・価値の全層で対立したことが、朝鮮を冷戦の「鉄のカーテン」の一部として分断させるに至った要因である。

採点のポイント・解説

1. 問 1: 「力の真空」という言葉を軸に、日本の敗戦が東アジアに与えた地政学的衝撃を説明できているか。
2. 問 2: 筆者のキーワード「相克」を用い、独立と統一のジレンマ（一方が立てば他方が立たぬ不都合な状態）を論理的に構成できているか。
3. 問 3: 本文の「A 爆弾のタイミング」「地政学的安全保障観」「力の真空」「分断体制の制度化」といった論点を整理しつつ、自分自身の知識（冷戦の開始、民族自決の原則など）と接続して論じられているか。